

# Oral Tradition の役割 :

## Louise Erdrich の *Love Medicine* を読む

平 野 真 理 子

### The Role of Oral tradition : Louise Erdrich's *Love Medicine*

Mariko Hirano

#### 抄 録

Native Americans は、彼ら独自の伝統である oral tradition の形式で古くからその民族にまつわる伝説や物語を継承してきた。今日、Native American Renaissance という運動が物語るように、Native American 作家の活躍は目覚ましい。彼らの作品には oral tradition の特徴が色濃く反映されているが、written text の中で oral tradition はどのように捉えられているのだろうか。本稿ではチッペワ族出身の代表的 Native American 作家 Louise Erdrich をとりあげ、oral tradition が彼女の作品でどのような機能を果たしているのかを、代表作である *Love Medicine* から論じてみたいと思う。

(2003年9月12日 受理)

キーワード：ルイズ・アードリック、『ラブ・メディシン』、ネイティヴ・アメリカン、口承伝承

#### Abstract

Native Americans have been handing down their legends and stories which are related to them from generation to generation by word of mouth. Today, as Native American Renaissance shows, Native American writers' creativity is remarkable and their works reflect oral tradition. How do they treat oral tradition in written texts? This paper examines the role of oral tradition in *Love Medicine*.

**Key words :** Louise Erdrich, *Love Medicine*, Native American, oral tradition

(Received September 12, 2003)

## 1

フランス系、ドイツ系の混血でもある、ミネソタ州生まれの Native American 作家、Louise Erdrich (1954年生) は、Chippewa 族の Turtle Mountain 部族に属している。彼女はかつての共同執筆者であり、夫の故 Michael Dorris と共にインタビューを受けた際に次のように答えている。

Sitting around listening to our family tell stories has been a more important influence on our work than literary influences in some ways.<sup>1</sup>

彼らの執筆の工程は、Erdrich と Dorris が互いの草稿、登場人物の設定、その他のあらゆる点に関して、まずは十分に話し合い、次の作業として各自が物語を紙に書きとめ、二人で納得のいくまで一語一語を厳選し言葉を決定してゆく、というものであった。文字をもたない Native American にとって、彼らの言葉に対する認識は non-Native American のそれとは大いに異なっている。例えばホビ族には“corn”を表すための単語が多数あるように、<sup>2</sup> 彼らの使用する言葉は彼ら自身との関わりから生まれたものであり、一語一語の持つ重みは大きい。その中で彼らは oral tradition という独自の文化を発展させてきた。

Louise Erdrich の代表作である *Love Medicine* では、“kitchen-table talk, bar talk, angry talk, curious talk, sad talk, teasing talk”といった“plain talk”が作品の活気の源となっている、という Silberman の指摘のように<sup>3</sup>、「話す」という行為に重点が置かれている。では *Love Medicine* の中で oral tradition はどのように反映されているのだろうか。

## 2

*Love Medicine* (1984, 改訂版1993) は、Native American 青年、Lipsha Morrissey のイニシエーションの物語である。そして彼の物語は、彼の住む、reservation のコミュニティーのメンバーの語りによって繋ぎあわされてゆく。つまりこの作品には、一人の主人公は存在せず、各章でコミュニティーのメンバーの一人ひとりが自分の物語を語る、という点において登場人物全員が同等の役割を担っている。以下はこの作品の構成を表にしたものである。(イタリック体は改訂版で付加された章である)<sup>4</sup>

Chapter	Narrator	Year
1. “The World’s Greatest Fisherman”	1. 3 d pers. … June Kashpaw	1981
	2. 1 <sup>st</sup> pers. … Albertine Johnson	
	3. 3 d pers. … anonymous	
	4. 1 <sup>st</sup> pers. … Albertine Johnson	
2. “Saint Marie”	1 <sup>st</sup> pers. … Marie Lazarre	1934
3. “Wild Geese”	1 <sup>st</sup> pers. … Nector Kashpaw	1934

	<i>"The Island"</i>	<i>1<sup>st</sup> pers. ...Lulu Nanapush</i>	<i>n.d.</i>
4.	"The Beads"	1. <i>1<sup>st</sup> pers. ...Marie (Lazarre) Kashpaw</i>	1948
		2. <i>1<sup>st</sup> pers. ...Marie (Lazarre) Kashpaw</i>	
5.	"Lulu's Boys"	<i>3 d pers. ...Lulu (Nanapush) Lamartine</i>	1957
6.	"The Plunge of the Brave"	<i>1<sup>st</sup> pers. ...Nector Kashpaw</i>	1957
7.	"Flesh and Blood"	<i>1<sup>st</sup> pers. ...Marie (Lazarre) Kashpaw</i>	1957
8.	"A Bridge"	<i>3 d pers. ...Albertine Johnson</i>	1973
9.	"The Red Convertible"	<i>1<sup>st</sup> pers. ...Lyman Lamartine</i>	1974
10.	"Scales"	<i>1<sup>st</sup> pers. ...Albertine Johnson</i>	1980
11.	"Crown of Thorns"	<i>3 d pers. ...Gordie Kashpaw</i>	1981
12.	"Love Medicine"	<i>1<sup>st</sup> pers. ...Lipsha Morrissey</i>	1982
	<i>"Resurrection"</i>	<i>3 d pers. ...Marie (Lazarre)</i>	
		<i>Kashpaw, Gordie Kashpaw,</i>	
		<i>Marie (Lazarre) Kashpaw</i>	1982
13.	"The Good Tears"	1. <i>1<sup>st</sup> pers. ...Lulu Lamartine</i>	1983
		2. <i>1<sup>st</sup> pers. ...Lulu Lamartine</i>	
	<i>"The Tomahawk Factory"</i>	<i>1<sup>st</sup> pers. ...Lyman Lamartine</i>	1983
	<i>"Lyman's Luck"</i>	<i>3 d pers. ...Lyman Lamartine</i>	1983
14.	"Crossing the Water"	1. <i>3 d pers. ...Howard Kashpaw</i>	1984
		2. <i>1<sup>st</sup> pers. ...Lipsha Morrissey</i>	
		3. <i>1<sup>st</sup> pers. ...Lipsha Morrissey</i>	
		4. <i>1<sup>st</sup> pers. ...Lipsha Morrissey</i>	

複数の語り手が登場するゆえに、“no singular point of view or authoritative narrative voice”<sup>5</sup>であり、語りの背景となる時代も linear ではなく、語りの人称も変則的である。oral tradition の特徴について Einhorn は次のように述べている。

...Native Peoples' oral tradition is their very existence; it is their soul. It is their unique communion with the Circle of Life. It is the web that connects their Ancients with those yet to come. When spoken it is not bounded by the voice or the time of the speaker; it is but the momentary expression of the great flow of a people. Like the flow of a river, it cannot be captured, as it is ever flowing, ever changing.<sup>6</sup>

彼が指摘するように、oral tradition と“circle”の概念は密接に関わりあっている。彼らは話をする際にも、circle (輪) になる。circle を形成することでその場にいる人間全員が同等の立場になり、各自が個々に自分の物語を語る。また、彼らが語るスピーチや物語、祈り、歌などは、動物になった人間、人間になった動物、自然界と精神世界を行き来する人

間や霊的存在、死と再生などがテーマとなり、冒頭から結論へと直線的な物語展開がなされるのではなく、結末が冒頭につながる、というように、語られる内容もが circle を描くような円環構造を持つという点でも特徴的である。一見断片的な物語の寄せ集めのような印象を受ける Love Medicine も、物語全体で一つの circle を成しているのだが、その circle はどのように形成されているのだろうか。作品に見られる oral tradition を検証しながら考察してみたい。

### 3

一族の住むノース・ダコタ州の reservation で生きることには耐えられず、外の世界に自分の居場所を探しに出てゆく June は、結局その居場所も見つけられず、アイデンティティーを確立できないまま、また reservation に戻るという行為を繰り返す。作品冒頭は、reservation を離れていた June が再び家族のもとへと帰るシーンで始まる。

Even when it started to snow she did not lose her sense of direction. Her feet grew numb, but she did not worry about the distance. The heavy winds couldn't blow her off course. She continued. Even when her heart clenched and her skin turned crackling cold it didn't matter, because the pure and naked part of her went on.

The snow fell deeper that Easter than it had in forty years, but June walked over it like water and came home. (7)<sup>7</sup>

そしてこの翌日、June は凍死体で発見される。上述の Einhorn の指摘にもあるように、oral tradition が“web”のイメージで捉えられるならば、June の死はまさに“web”の中央に位置していると考えられる。なぜなら、相互関係が基本となる oral tradition では、たとえ個々の物語が一つの独立した物語として読むことが可能であっても、物語全体との関わりを考えることなしに個々の物語を完全に理解することは不可能であり、Love Medicine では June の死が個々の物語を繋ぎ合わせる役割を果たしているからである。

また oral tradition で頻出する“trickster”も重要な役割を果たしている。呪術を扱うことのできる不思議な能力を供えた存在を意味する“trickster”とは、そもそも19世紀に文化人類学の分野で登場した言葉であるが、Native American の oral tradition では昔からお馴染みの存在である。チッペワ族では、古くから“between humans and the Manitos”<sup>8</sup>という存在として特別視されてきた (Manitos とは“an eternal spirit who has existed among the Ojibwa [Chippewa] since the time of creation on the world”<sup>9</sup>という神聖な存在である)。この作品の“trickster”は、人の心の表裏をよむことができ、手で触れただけで人を癒すことのできる力、“the touch”) を生まれながらにして備える Lipsha である。June がコミュニティを出て行った後、祖母の Marie に引き取られ育てられてきた Lipsha は、実の母親に捨てられたと信じており、母の仕打ちを許せないでいる。そして両親が誰なのかも知らずにいる。ある時、Lulu に夢中になっている Nector に落胆する Marie の様子を見た

Lipsha は、Marie のもとへ帰るよう“the touch”を行使するが、何の効果ももたらすことができず、愛する夫を取り戻したい Marie に“love medicine”を手に入れてほしいと頼まれてしまう。“love medicine”とはチツペワ族に古くから伝わる特別な薬で、「他のどの部族もチツペワ族ほどにこの薬をしっかりと伝えてはいない」という一族の誇るべき秘薬である。

You don't just go out and get one without paying for it. Before you get one, even, you should go through one hell of a lot of mental condensation. You go to think it over. Choose the right one. You could really mess up your life grinding up the wrong little thing. (241)

“love medicine”の入手方法を必死で考える Lipsha は、“goose”の心臓を 2 人に食べさせることを思いつく。一生を番いで過ごす“goose”の心臓を食せば、献身の感情が互いに芽生えるだろう、という算段だ。しかし自分で“goose”を捕らえることに疲れた Lipsha は、手抜きをして、スーパーで冷凍の“turkey”の心臓を手に入れる。そして嫌がる Nector に無理やり食べさせたところ、心臓をのどに詰まらせ彼は窒息死してしまう。皮肉にも“trickster”であるはずの Lipsha 本人が“love medicine”について無知であり、“a matter of chemistry” (黒41) ほどにしか考えていなかったのだ。この一件で癒しの力を失った Lipsha は、悲嘆に暮れる Marie の姿を目の当たりにして、本当は自分には不可解であった力をもてあそんだことを反省する。

“Love medicine ain't what brings him [Nector] back to you, Grandma. No, it's something else. He loved you over time and distance, ... It's true feeling, not no magic. No supermarket heart could have brung him back.” (257)

本来、自由自在に姿を変え、魔術を使って人間をだますはずの“trickster”が、この作品では「愛」という人間の感情によってその力を完全に奪われている点に注目したい。ここで Erdrich が描き出しているのは、呪術にも屈しない「愛」の力であり、自己を取り戻す生身の人間、Lipsha の姿である。“trickster”としての力を完全に失った Lipsha は自分探しの旅の中で、これまで目を背けてきた両親の、彼に対する深い愛を知る。“famous politicking hero, dangerous armed criminal, judo expert, escape artist, charismatic member of the American Indian Movement” (341) という一族の誇るべき人物、Gerry Nanapush という父に直面し、その父と車の中で初めて二人で言葉を交わす。その車とは June のもう一人の息子である King が、母親の死後手にした保険金で購入した、いわば June の化身ともいえるもので、Lipsha が King との賭けに勝って手に入れたものである。そして自己を取り戻す力を与えてくれたのは父の、“You are a Nanapush man”という言葉であった。“love medicine”は何にも屈しない「愛」であることを身をもって知った彼は癒しの力を取り戻す。そして自己の存在に初めて確信を持つことのできた Lipsha は、目指すべき場所、reservation へと戻ってゆく。

The morning was clear. A good road led on. So there was nothing to do but cross the water, and bring her home. (367)

ここで注目したいのは、この引用の最後の一文と冒頭の June の場面の引用の最後の一文である。Lipsha が新車に乗って reservation に戻ったことは、彼が母を受け入れたことで、(車に transformation した) June が“came home”できたことを意味している。ここで、この最後の一文が冒頭部分につながり、作品全体が一つの circle を形成するのである。

以上見てきたように、この作品では様々な oral tradition の要素が取り入れられて Lipsha のイニシエーションの物語が描かれているが<sup>8</sup>、Louis Owens は、断片的な物語が時間を交差して語られてゆくこの作品に関して、

…the novel's fragmented narrative underscores the fragmentation of the Indian community and of the identity that begins with community and place; and the fragmentation of this community, the rootlessness that results in an accumulation of often mundane tragedies among the assorted characters, subtly underscores the enormity of what has been lost.<sup>10</sup>

という見解を示している。しかしこの指摘は作品を一面的にしか捉えていないと言えるだろう。なぜなら、自分探しの旅に出て、自分の出生をすべて知り、アイデンティティーを確立して reservation へと戻ってゆく、チッペワ族が誇る若者 Lipsha の誕生という一つの物語を形成しているのは、web 状に張り巡らされた“fragmented narrative”一つひとつに他ならないからだ。

#### 4

oral tradition が作品でどのような意味を持つのか、結論を下す前に、ここで「口承文学」(“oral literature”) という表現について検討してみたい。Ong が *Orality and Literacy* の中で論じているように、“oral tradition”あるいは“a heritage of oral performance, genres and styles”を総称する「口承文学」という表現は、今日ごく普通に用いられているが、そもそも「声に出して語られた物語の文学」という矛盾した表現が研究者にすら浸透している状況について考える必要がある。口承芸術の諸形態は、書くことが知られていない何万年もの間に発達してきたのだから、書くこととは何の関係もなかったのは明らかであるはずだ。にもかかわらず研究者たちはあまりにもテキスト的なものに支配されてきたために、「書く」という行為に関係づけずに口承芸術をそっくりそのままの形で効果的に思い描くことを可能にする概念が今日まで一つとして形成されてこなかった。その結果として、長年にわたって口承芸術は「口承文学」という術語のもと、学者によって研究されてきた、と Ong は指摘する。<sup>11</sup>これまで Native American fiction でモチーフとされてきた、“the mythic”や“the legendary”もこの観点から理解されてきたが、Erdrich によって初めて個人の声から紡ぎだされる、“communal voice”が Native American fiction のモチーフとして描かれるよう

になった。<sup>12</sup> Erdrich は現代の Native American 作家の使命について次のように語っている。

In the light of enormous loss, they [contemporary Native American] must tell the stories of contemporary survivors while protecting and celebrating the cores of cultures left in the wake of the catastrophe. (イタリック著者)<sup>13</sup>

白人文化を受け入れながらも Native American としての誇りを失わず力強く生きる、現代の Native American の姿を描き出すためには、作家は「語る」ことが必要である、と Erdrich は主張する。作家 Erdrich が取るこの立場は、「口承文学」という表現が使用されている現状を見直す上で大きな意味をもつ。なぜなら、Erdrich のアプローチは、以下に Ong が指摘するように、本来、声の文化は文字の文化を必要とする、という声の文化の性質を的確に捉えたものだからだ。

Oral cultures indeed produce powerful and beautiful verbal performances of high artistic and human worth, which are no longer even possible once writing has taken possession of the psyche. Nevertheless, without writing, human consciousness cannot achieve its fuller potentials, cannot produce other beautiful and powerful creations. In this sense, *orality needs to produce and is destined to produce writing*. (イタリック著者)<sup>14</sup>

現在、白人と Native American の関係は、白人の伝統的な学門分野からと Native American 作家自身による作品から、という二つの分野から語られており、“[t]hose of us who are in the relevant academic disciplines have still not made up our collective mind about whether it is appropriate to aim for a converging of the two versions of the story, or even whether such a convergence is possible”<sup>15</sup>と L.Maddox が伝えているように、この分野の研究はまだ議論される余地がある。しかし声が主体となり、「語る」ことが「書く」ことを必要とした *Love Medicine* は、声の文化と文字の文化の関係を模索する、まさに現在の研究に大きく貢献する作品であると言えるのではないだろうか。

#### 注

- 1 Hertha D. Sweet Wong, ed., *Love Medicine: A Casebook* (New York: Oxford UP, 2000) 108.
  - 2 Connie A. Jacobs, *The Novels of Louise Erdrich: Stories of Her People* (New York: Peter Lang, 2001) 27.
  - 3 Wong, *Love Medicine* 146.
  - 4 Wong, *Love Medicine* 102.
  - 5 Wong, *Love Medicine* 87.
  - 6 Louis J. Einhorn, *The Native American Oral Tradition: Voices of the Spirit and Soul* (Westport: Praeger Publishers, 2000) X I.
  - 7 Louise Erdrich, *Love Medicine* (New York: HarperPerennial, 1993)
- 本論文中の作品からの引用はすべてこの版による。なお、括弧内の数字はそのページを示す。

- 8 Jacobs, *The Novels of Louise Erdrich* 148.
- 9 Jacobs, *The Novels of Louise Erdrich* 22.
- 10 Wong, *Love Medicine* 64.
- 11 この点に関しては Walter J. Ong の *Orality and Literacy* 第 1 章を参照のこと
- 12 Jacobs, *The Novels of Louise Erdrich* 41.
- 13 Wong, *Love Medicine* 48.
- 14 Walter J. Ong, *Orality and Literacy* (London : Routledge, 1982) 14.
- 15 Lucy Maddox, *Removals : Nineteenth-Century American Literature & the Politics of Indian Affairs* (New York : Oxford UP, 1991) 4 .